

令和2年度 第1階 上京区まちづくり円卓会議（安心安全部会）摘録

日 時： 令和2年7月28日（火） 午後7時から午後9時まで

場 所： 上京区総合庁舎4階 大会議室1・2

出席者： 【学識者】

新川議長，大窪委員

【円卓会議委員】

東委員，三上委員，倉辻委員，坂下委員，赤井委員，井上委員，明石委員

【区役所等】

林区長，三谷室長，山内課長，高橋課長，石井係長，西川担当，松井まちアド，加藤まちアド，アルパック（渡邊）

1 議題

（1） コロナ禍による価値観等の変化について

委員 自身のことで言うと，コロナによって夜に出歩かなくなった。

地域での会合を開催できない状況の中，地域内での意思疎通の機会が減少している。

個人的に，空き家に関心をもっている。空き家になると建物が弱り，地域の中で色々な面で影響が出てくると考えている。

委員 地域コミュニティは，特に災害時の助け合いの観点から重要であると考えている。

そのため，常日頃から隣近所と親しい関係をつくることは大事であると考えている。対面でふれあい，顔を見ながら話をすることが大事だと思っている。

新型コロナウイルス感染症を契機に，地域の結びつき，隣近所・町内会等の絆の重要性について，改めて気付いてほしいと考えている。

委員 地域内には，民泊，ゲストハウスがたくさんある。

新型コロナウイルス感染症以前は，昼夜を問わず多くの観光客等が来られていたが，最近は，観光客等を見る機会も少なくなり，寂しくも感じている。

しかしながら，地域と観光客等とのコミュニケーションは必要であると感じており，コロナ後を見据え，民泊利用者等に向けた地域の広報誌作成やPRができないかと考えている。

新型コロナウイルス感染症により地域での会合が開催できない状況だが，感染症対策をしっかり行っただけでの会合を少しずつでも増やしていく必要があると考えている。

委員 西陣関係の仕事をしている。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり，着物やゆかたが売れない状況である。上京は，やはり西陣が良くならないといけないと考えている。

委員 町内では，一人暮らしや空き家が増え，人の出入りが少なくなってきたように感じていたが，新型コロナウイルス感染症の影響で，近くでお話しすることもできなくなった。

コロナ禍ではあるが，地域で継続してきた地蔵盆等の行事は継続したいと考えており，感染症対策を講じながら，短時間の地蔵盆を開催する予定である。

委員 学区内では，「どのように高齢者とのコミュニケーションをとるか」をテーマに，カフェや配食，学区内の町会長による単身高齢者の見回り等を実施している。

学区においては，行事の周知等を行う場合，回覧しか方法がない状況であることから，コロナ禍

では書類上のコミュニケーションにはなるが、力を入れていきたいと考えている。

委員 コロナの特別給付金をいただいたので、公に還元したいと考え、車椅子、手押し車等を購入した。
一つの案だが、こうした給付金を、地域の防災や安全安心の備えのために使ってはどうかといった広報等ができないか。

災害の発生により、例えば停電が発生すると、冷蔵庫等が使えなくなり、高齢者等の生活は立ち行かなくなる。事前の取組は重要であると考えている。

(2) **資料3** 方針1について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 計画案では、「家庭」「地域」「行政」という形で整理されている。

どれにも関わることだが、高齢者や身障者は広く災害時要援護者と整理されており、災害が発生すると、こうした弱い人たちに大きな被害が出る。地域でも見守りの話があったので付け加える必要があるのではと感じた。

また、逆に、高齢者であっても、地域に関する知識や、地域とのつながりを基に、災害時に人をまとめる力等を発揮できる可能性がある。高齢者は守るべき対象であると同時に、地域のために活躍できる貴重な人材・資源である。

例えば、東日本大震災時、漁村では、避難所運営は地域のコミュニティが担っていた事例があるように、上京区でも、地域に長く住んでいる経験や、地域のことをよく知っていることで、「マイナスの面をプラスに生かす」といった、災害時の対応や地域での支え合いも、上京ならではののではないかと感じた。

また、全体に関わる話だが、「コロナ禍でも対面でのコミュニケーションの重要性」や「絆の重要性」を指摘する声が、本日の議論でも数多く出ている。

元々、上京の伝統的な地域では、地蔵盆や伝統的なお祭り等がベースにあることで、災害時にも普段通りに支え合いができる強さがあったのではないかと考えている。

コロナの問題があって地域の伝統行事の実施が躊躇される状況は、防災面でも非常に大きな問題であると考えている。コロナだからと諦めるのではなく、コロナを踏まえて伝統的な行事をどう変えることで、地域のふれあいや支え合いを維持することができるのかといった方向性で考えていく必要があると感じた。

委員 我々の町内でも地蔵盆やお千度といった行事があるが、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の観点から中止となった。

コロナ禍では、行事の形を変えても人が集まり密となることが懸念されると同時に、集まらなければ地域でのコミュニケーションがとれない問題が出ている。地域の役員は非常にジレンマを抱えている。

委員 新型コロナウイルス感染症は、大勢集まるとリスクは高いと言われているが、全く開催できないわけではない。全員が一同に介することはコミュニケーションを取るうえでも大切だと思うが、参加者を分散して実施する方法もあるのではないかと。

小規模な開催とすることで、これまで話す機会がなかった人どうしのコミュニケーションが生まれるかもしれない。

また、ネットワーク、リモートを活用することで、今まで参加できなかった人が地域のコミュニティの行事に参加する可能性もある。

委員 災害に備え、消防団と自主防災の連携をさらに充実させていく必要がある。また、京都では、室戸台風、コレラ、戦時中の空襲もあった。これまで色々な災害にあってきた。「いつ災害等に合うかわからない」ということをもっと周知する必要がある。

新型コロナウイルス感染症により、地域での古紙回収の積み込みに進んで協力してくれる方々も

出てきた。新型コロナウイルス感染症を経験し、「他人ごと」ではなく「自分ごと」として地域のこ
と等を考えてくれている人が増えることを期待している。

委員 方針1のタイトルについてだが、「コロナ禍の中での災害対策」といった意味合いを持たせてはど
うか。普通とは違うという意味合いも含めての提案である。

(3) **方針2** 及び **方針3** について、加筆・修正が必要な項目等について

委員 上京区の交通問題についてだが、自転車が車両という認識がないと思われる人が多いように感じ
ている。引き続き、自転車のマナー啓発等に取り組む必要がある。

委員 視覚障害者の視点から話したい。

白杖が自転車に巻き込まれる事故事例が多発している。区として、更なる対策や指導が必要であ
ると思う。

委員 上京警察署と連携し、各学区で青パトの取組を実施している。学区では、月1回、学生の通学時
間に上京警察署と連携した自転車指導を実施している。

委員 本日の議論で改めて感じたことは、コロナ禍でどう取組を定義するのかということ。

委員の発言にもあったが、取組例を検討するに当たっては、コロナ禍であることを踏まえた精査
をすることで、新しいアイデアが出てくるのではないかと考えている。

次に、上京ならではの歴史や文化に裏打ちされた資源を、災害時にどう活用するかを考えること
が、上京の安心安全の計画に繋がるのではないかと感じた。

3点目は、これまでの交流が、これまで通りでは難しくなってきたということ。

伝統や絆の良さを活かした新しい交流の形が、防災や安心安全を支える重要なキーワードになる。
こうした検討が、より安全度の高い方針づくりにつながると考えている。

特に、コロナの問題を安全安心の側面から見ると、色々な条件が厳しくなっている。避難所を例
にすると、1人当たりのスペースが今まで通りでは足りなくなっている。コロナの状況を織り込み
ながら安全安心を見直すことで、余裕のある安全安心のための方針に繋がっていくのではないかと
考えている。

また、高齢者等について言うと、一般には災害時には支援を受ける対象と思われがちだが、コミ
ュニティを支える重要な人材である。高齢者も含め、上京ならではの貴重な資源をどう活かしてい
くのかという視点で安心安全に係る計画づくりを行うことが重要であると考えている。

上京区は、古くから地域で大切にされてきたお寺や神社が多い地域である。コロナ禍での大規模
災害が起きた場合、体育館では避難者全員を入れることができない。必ず何割かは在宅避難をしな
いといけなくなる。一番の問題は、避難所にいないと、水、食糧及び情報等が伝わらないというこ
と。在宅避難をする際に、水、食糧及び情報等をどうするのか。そういう時に地域の学生等の支援
を得ながら、地域のお寺や神社を物資の支援拠点として使わせてもらえないか。上京の良いところ
を資源として捉え直し、「安心安全」に向けた取組を進めていくことが重要である。

議長 議論の中で気になった点として、重要な1つ目は、コロナを通じて感染症の流行が、これまでの
地域の活動を大きく制約するという点。

しかしながら、それがかえって地域皆様の相互の結びつき、つながりの大切さ、ご近所付き合い
の意味を確認する非常に良い機会になったのではないかと。

コロナがもたらしてくれた2つ目の側面は、安全安心な暮らしを守るために、「離れていないとい
けない」と同時に「近くにいて助け合わなければいけない」という両方を達成していく地域づくり
が大事であるということ。

別な言い方をすると、近くにいて助け合うことはこれまでやってきたが、遠くにいて何をするの
か。感染症予防や別の問題で切り離されてしまっているかもしれない所や人とのつながりをどのよ

うに築いていくのか。コロナがもたらしたリモートな状況は地域の共助や近助を考える際にとっても大切になってくると思った。

地蔵盆や地域の寺社仏閣は、これまでから地域の人たちにとっての拠り所だったが、新型コロナウイルス感染症との共存を考えると、やたらに集まって感染症を広げてはいけない。

また、障害をお持ちの方にとっては、そういう集まり自体が近づきにくいことがあるかもしれない。たまたま遠く離れていても、本当はその学区に深く関わっている人がいるかもしれない。本日の議論では、そうしたそれぞれの個性や暮らしを越えてリモートの世界はコミュニティや地域を繋ぎ直してくれる可能性もあるのではと感じた。

重要な2つ目として、それぞれの学区や地域の中で、どのように自助、共助、近助を創り上げていくのかということ。

地域コミュニティは、時には顔と顔を突き合わせる。そして、感染症予防上、気を付けないといけない時には、お互いの距離を適切に取りながら、でも対面を忘れない。

これからのコミュニティ作りや助け合いの在り方について、本日は沢山のヒントがあった。

重要な3つ目として、議論にあった交通安全や自動車のことで、見回りや青パトの話もあったが、地域の中でそうしたお互いを見守りや、一緒に地域の安全を守っていこうという活動が定着してきていること。地域の安全について、お互いがそれぞれの安心安全を守り合い、お互いに見守り合う姿をつくらないと、本当の意味での安心安全はないのかなと感じた。

最後に、重要な4つ目として、地域のコミュニティにせよ、見守りにせよ、そういうところに入っている際に内の人、外の人の違いがあるということ。

別な言い方をすると、学区の中でどのように地域にお迎えしていくのか、学区の安心安全を共に守っていただける可能性のある外の人との関わり方をもう少し前向きに整理された形で考えていく必要があると感じた。

空き家の問題や家主との関わり、地域と関わりの無い人が入ってくることが今後も考えられる。

そうした人たちを地域で迎える仕組みや、外の人に地域の人になっていただくことが大切である。そうした外との関わり方が、地域の安心安全を実現する大事な手掛かりであると感じた。

以上